



異世界でカフェを  
開店しました。13

---

甘沢林檎  
*Ringo Amasawa*

RB

レジーナ文庫

登場人物  
紹介

▲  
バジル

緑の精霊。  
リサの料理が大好きで  
よく味見している。

好きな食べ物：卵焼き

▲  
ハウル

リサの教え子。  
学院の料理科を卒業し、  
夢だった王宮の厨房に  
就職したのだけれど……？

好きな食べ物：パイ

▲  
くろかわりさ  
リサ(黒川理沙)

料理好きの元OL。  
カフェの店長をしつつ  
学院で料理を教えている。  
出産を控えているため  
仕事は一時お休み中。

好きな食べ物：和食

▼  
ヴェルノ

オリヴィアの息子。  
無邪気な性格で  
キースを慕っている。

好きな食べ物：野菜オムレツ

▲  
キース

王宮の元副料理長。  
リサやジークと同じく  
料理科で講師をしている。

好きな食べ物：唐揚げ

▲  
オリヴィア

カフェの接客担当。  
夫を亡くして以来、  
一人で子育てしてきた。

好きな食べ物：肉じゃが

▲  
ジーク

リサの夫で  
カフェの副店長。  
妊娠中もアクティブな  
リサを心配している。

好きな食べ物：  
プリン

▲  
アナスタシア

リサの養母。  
人気ブランドの  
デザイナーでもある。

好きな食べ物：  
カルボナーラ

▲  
ギルフォード

リサの養父。  
王宮の魔術師長で  
精霊を見ることができる。

好きな食べ物：シチュー

## 目次

異世界でカフェを開店しました。

13

7

ある料理人の愛情

245

ある精霊の守護

281

書き下ろし番外編  
ある子供の任務

301

異世界でカフェを開店しました。  
13

## プロローグ

鍋の中身がぐつぐつ煮え、フライパンからはジュージューと焼ける音がする。包丁がリズムよく奏でる音に合いの手を入れるかのように、ポウルの中で泡立て器がテンポよく音を刻む。

そんな中――

「こっちもやってくれ！」

「おい、これどうなってるんだ！」

怒鳴り声にも近い、男たちの声が飛び交う。

ここは王宮にある厨房。食事の数時間前からはじまる調理は、佳境を迎えていた。王宮に関わる人間すべての食事を作っているため、その数は百食以上。

大きな会議や催しがある時は、その数倍を用意しなければならぬこともざらだ。

そんな厨房の中を、真新しいコック服に身を包んだ青年が足早に移動する。

彼はハウル・シユスト。

この秋から王宮の厨房で働きはじめた新米料理人だ。

「ハウル、こっち手伝ってくれ！」

「はい！」

前菜の下ごしらえが終わり、それを担当者に届けたところで、今度はスープの担当者から声をかけられる。まだ新人のハウルはそうやって、いろんな部門の間を歩き来していた。

やがて嵐のような時間が過ぎ去り、料理人たちは次の調理がはじまるまでの間、休憩を取る。

厨房から料理人たちが出ていく中、ハウルだけが一人残っていた。

「はあ………」

ハウルは深い深いため息を吐く。

このため息は疲労のせいもあるが、それだけが理由じゃない。

さつきまで賑やかにいろんな音が響いていた厨房は、しんとしている。

「はあ………」

もう一度こぼれたハウルのため息が、広い厨房の中にとても大きく響いた。

## 第一章 お腹が大きくなりました。

「よいしょ」

椅子から立ち上がる拍子に漏れた言葉に、彼女はハッとした。最近、動く時について『よいしょ』と言ってしまう。

その理由である大きなお腹を、彼女は自然と手で撫でた。

ここフェリフォミア王国では珍しい黒髪を持つ彼女の名前は、リサ・クロカワ・クロード。

元々この世界の住人ではなく、異世界からやってきた。しかし、現在は王都にある人気店カフェ・おむすびのオーナー兼店長であり、フェリフォミア国立総合魔術学院に設立された料理科の主任講師でもあった。

ただ、それらの仕事は一時的にお休みしている。

なぜならリサのお腹には新たな命が宿っているからだ。

最近、お腹はさらに大きく、そして重くなってきた。そのため、先程のようなかけ声

を自然と出してしまふ。

「リサ、そろそろ行ってくる」

部屋の外から顔を出した男性が、そう声をかけてきた。

銀髪に青い瞳の、容姿が整った彼はジーク・ブラウン・クロード。リサの夫であり、

今は彼女に代わってカフェ・おむすびの臨時店長をしている。

「玄関までお見送りするね」

彼を見送るために、リサは大きいお腹を気遣いながら立ち上がったのだ。

「外は寒いからここでもいいよ」

「大丈夫！ さっきメリルにストール出してもらったからー」

ほらと言つて、リサは持っていた大判のストールを体に巻きつける。これは先程、リ

サ付きのメイドであるメリルが用意してくれたものだ。

ここ数日は一段と寒くなった。冬本番に向けて、冷たい風が吹きはじめている。

「それに家の中でくらい運動しないと」

カフェと料理科の仕事をお休みしている今は、きつかけがなければ体を動かすことがない。玄関まではそう遠い距離ではないけれど、せめてそれくらいは歩きたいと思つていた。

「わかったよ」

ジークはやれやれと言わんばかりだが、エスコートしてくれるのだろう。リサに手を差し出してくれた。

手を重ねると、彼の体温が伝わってくる。骨張っていて大きな彼の手にすっぽりと包まれた。

そのまま手を引かれ、リサは玄関へ移動する。

玄関ホールにやってくると、ジークはドアを背にしてリサに向き直った。

「それじゃあ、行ってくる」

「うん、いつてらっしゃい。カフェのことよろしくね」

お腹を<sup>いた</sup>ちつつ、軽くハグをする。ジークから頬にキスをされ、リサも同じようにした。出る間際、「温かくするんだぞ」と言い残していったジークに小さく笑いながら、リサは手を振って彼を送り出した。

「リサ様、体が冷えますのでお早く」

メイドのメリルに呼びかけられて、リサは玄関ホールから部屋に戻る。後ろからついてくるのは、玄関の外までジークを見送っていたヴァレットのクライヴだ。

「リサ様、今日はアナスタシア様と本館で過ごされるとお聞きしていますが……」

「そうそう。シアさんが相談したいことがあるって言ってたけど……」

——生まれてくる子供の服のことかな……？

アナスタシアはリサの養母であり、シリルメリーという女性に大人気の服飾ブランドのオーナー兼デザイナーだ。

リサの妊娠がわかってからというもの、アナスタシアは初孫の誕生を待ち望んでいる。だから相談したいことがあると言われて、真っ先に『また赤ちゃんの服のことか』とリサは思ったのだ。

そうリサが思うのも無理はない。何しろアナスタシアは気が早いことに、すでにたくさん服を作ってくれている。それこそ赤ちゃんが着尽くせないくらいに……

しかも、まだ性別がわからないからといって、男女両方の服を作っている。どちらの性別でも使えそうなデザインのものもあるとはいえ、それはごくごく一部だ。

リサもたびたび『もういいから』と言っているのだが、シリルメリーでも売り出したと言われ、強く止められないでいた。

リサとジークが生活している別館から、渡り廊下を通ってクロード邸の本館へ向かう。ジークと結婚するまではリサも本館に住んでいたため、勝手知ったる建物だ。

メリルからアナスタシアはサンルームにいと聞いていたので、リサもそこへ向かう。お茶会でも使われているクロード家のサンルームは、屋敷の中で一番陽当たりのいい場所にある。

天気がいい日は陽が差し込んで部屋が暖くなるため、今のような冬の時期でも快適に過ごせるのだ。

部屋の前に到着するとメリルが扉をノックする。部屋の中から「どうぞ」という返事があったので、リサは入室した。

「リサちゃん、いらっしやい」

ソファでくつろいでいたのは、ゆるりとしたウェーブのかかるピンク色の髪を持つ女性だ。彼女がアナスタシアである。

「お待ちせしました、シアさん」

アナスタシアとは先程、朝食の席でも顔を合わせていた。

「さあ、こつちにどうぞ」

アナスタシアはリサを手招きして、自分が座るソファの隣へ誘う。

リサは促されるまま、彼女の隣に腰を下ろした。

「日に日に大きくなるわねえ」

座ると余計に目立つお腹に視線を落として、アナスタシアは表情を緩ませる。

「胎動も結構激しくなってきたんです」

「まあ！ 触らせてもらってもいいかしら？」

「もちろんですよ！」

リサが快諾すると、アナスタシアはワクワクした顔でリサのお腹に手を当てた。

「赤ちゃん、お祖母様ですよ」

優しく呼びかけるリサの声に、一瞬、間を置いてからポコンとお腹が動いた。

「わっ！ 今ハッキリと感じたわ……！」

アナスタシアは興奮したように頬を染めた。そして、もう一度リサのお腹に手を当て直すと、今度は自ら話しかける。

「赤ちゃん、お祖母様ですよー！」

また少し間を置いてから、ポコンと反応があった。

「うふふ、もう言葉がわかるのかしら？」

楽しげに微笑んだアナスタシアは、感触があった箇所を撫でる。

「声は伝わっていると思いますよ」

「そうだといいわねえ。それにしても、私、お祖母ちゃんになるのね」



「……あ、嫌でした……?」

違う呼び方の方がよかっただろうか、とリサはハツとしてアナスタシアの顔を窺った。「ああっ、違うの！ むしろ嬉しいのよ〜！ 実際に赤ちゃんからそう呼ばれるのはまだ先でしょうけれど、初めて自分がお祖母様ばあって呼ばれて、赤ちゃんがそれに応えてくれたから実感が湧いてきたの」

「そうだったんですね……それならよかったです」

「ふふ、お祖母様ばあって早く呼ばれたいわ」

そう言ってアナスタシアはとても嬉しそうに笑う。それを見てリサもホツとした。

大きな窓から差し込む冬の日差しがぽかぽかと気持ちいい。

そんな中、リサとアナスタシアは、お腹の子供の存在を確かに感じながら、微笑み合うのだった。

## 第二章 経験者の話はためになります。

「そうそう、リサちゃんに相談があるのよ！」

アナスタシアが何かを思い出したように、そう切り出した。

「あのね、リサちゃん。ステイルベンルテアをやらない？」

「ステイルベンルテア？」

リサは初めて聞く言葉に首を傾げる。そのリサの反応を見て、アナスタシアが説明をはじめた。

「ステイルベンルテアっていうのはね、赤ちゃんが無事に生まれてくるように、って願いを込めて開くパーティーのことよ。お母さんになる女性を勇気づけるためでもあるから、友達や親しい人を集めてお祝いするの。でも妊婦さんにお酒はよくないから、お茶を振る舞うのよ」

「そんな行事があるんですね」

リサが元いた世界ではベビーシャワーと呼ばれるものだ。といっても日本ではそこまですべきじゃない世界ではなかったため、リサはあまりピンと来ていない。でも、話を聞いて楽しそうだなと思った。

「基本的に妊娠中の女性が主催するんだけど、一人じゃ大変だから家族や友人が協力するのよ。もしよかったらリサちゃんのステイルベンルテアは私が協力したいと思ってるんだけど……」

めた。

「ステイルベンルテアにはいろいろな形があるのよ」

アナスタシアはステイルベンルテアについての知識がまったくないリサに説明をはじ

「もちろんです！ というか、私はステイルベンルテアを知らないのです、すごく頼っちゃ  
うと思うんですが……」  
「全然！ むしろ頼ってほしいわー！ ……そうは言っても、私は自分のステイルベン  
ルテアを開いたことがないから、人に招待された経験を元にやるしかないんだけどね」  
「そう言ったらアナスタシアは苦笑する。  
アナスタシアと夫であるギルフォードの間には実の子供がいない。だからアナスタシ  
アは自身のステイルベンルテアを開いた経験がないのだ。  
そのせいもあって、リサのステイルベンルテアに協力したいのかもしれないし、それ  
なら自分だけでなくアナスタシアにも楽しんでほしいとリサは思った。

「うん、やりましょう、シアさん！ ステイルベンルテア!!」

「ええ、楽しい会にしましょう！」

リサとアナスタシアは、手を取り合って頷いた。



「まずはテーマね。どういう会にするか、きちんと決めておくのが成功の秘訣だと聞いたわ」

「テーマ、ですか……?」

「たとえば、誰を招待するかによってテーマが変わってくるわ。友達だけなのか、親族も呼ぶのか、はたまた仕事の関係者まで広げるのか。規模も雰囲気も十人十色なのよ」

リサがイメージしたのは、本当に親しい人だけを呼んでする気楽なパーティーだったが、それだけじゃないようだ。

「女性だけを呼ぶ会もあるし、子供も参加可能にしたり、逆に大人だけに限定したり、主催する人によるわね」

「すごく自由なんですね」

「そうねえ。でもあくまで主役は妊婦さんとお腹の赤ちゃんよ。主役の妊婦さん自身がどういう会にしたいか、っていうのが重要なもの」

「なるほど」

アナスタシアの言葉を聞いて、リサは少し考える。

—— 私なら、親しい人たちを呼んで、日頃のお礼を伝える会にしたいかなあ。今もカフェ・おむすびや料理科を支えてくれる人たちのおかげで、こうして休んでいられるわ

けれど……

リサがカフェや料理科で担っていた役割はとて大きかった。

だからリサの妊娠がわかってからというもの、主に夫であるジークの働きかけで、リサがいなくても仕事が回るような態勢を作っていた。

幸い、料理科は年を重ねることに講師の数が増え、リサが直接教えなくても大丈夫な環境になりつつあったし、カフェ・おむすびの方も王宮の厨房からの出向期間を延長したヘクターと、新しくメンバーになった料理科の卒業生・ルトヴィアスが頑張っている。

もしこれが、数年前——リサがこの世界に来たばかりの頃や、カフェや料理科ができたばかりの頃であれば、不可能だったはずだ。

当時、フェリフォミアの食文化はまだ発達していなかった。リサにしか作れない料理がたくさんあり、その役目を誰も代わることができなかっただろう。

それから数年。

カフェ・おむすびや王宮、料理科などでリサが努力し、周りの人たちが協力し続けてくれたおかげで、リサの代わりを務められる料理人が何人も育っている。

リサは彼らに成長するきっかけを与えたかもしれないが、成長したのは彼ら自身の努

力の結果だ。

そんな彼らをはじめ、これまで関わった人々に感謝の気持ちを伝えたいとリサは思っていた。

豪華でかしこまった会にするよりも、温かくもてなせたら嬉しい。そのことをアナスタシアに伝えると、「リサちゃんらしいわね」と笑顔で賛成してくれた。

「じゃあ、招待する人たちはそれぞれお仕事もあると思うから、早めに招待状を送りましょう」

「そうですね。皆さん、スケジュールの調整が必要だと思いますし」

リサとアナスタシアは相談し、ステイルベンルテアをひと月半後に開くことに決めた。

その日の夜。

「ステイルベンルテア？」

「そう。シアさんから開いてみたらって提案されてね。楽しそうだなって」

カフェから帰ってきたジークに、リサは今日決めたことを話す。そしてソファに座ったままジークにたずねた。

「ちなみにジークは参加したことある？」

「確かライラが生まれる前に、母さんが開いてたな」

ライラというのはジークの妹だ。といっても歳が離れているため、ライラの生まれる前に母親が開いたステイルベンルテアのことを、ジークは覚えていたようだ。

「その時のステイルベンルテアはどんな感じだったの？」

「詳しくは覚えてないけど、割と小ぢんまりとした感じだったと思う。自宅にごく身近な人だけを呼んで開いたはずだ。ライラは三人目の子供だったというのもあって、そんなに大きな会にはしなかったのかもな」

「なるほど……」

「身近なメンバーだけを呼んで、気張らずにやるのが一番じゃないか？ 妊娠中なんだから準備も大変だし、頑張りすぎるのは体によくないぞ」

そう言いながらソファの隣に座ると、ジークはそっとリサのお腹に手を当てた。

前から何かとリサのお腹を触ることが多かったが、最近はその頻度がさらに高くなってきた気がする。

日に日に大きくなっていくお腹。胎動も頻繁にあり、それを感じることでジークも父親になる心構えをしているのだろう。

ただ、無言でじっと手を当てるのはどうかとリサは苦笑する。せつかくなら何か話し

かければいいのに……

——心の中で会話してるのかな？

「今触っているのは、あなたのお父さんですよー」

代わりにリサが話しかけてあげると、その瞬間、お腹の赤ちゃんが動いた。

「……おお」

ジークの手にもその感触が伝わったのだろう。彼は小さく声を上げた。

チラリと彼を見れば、とても嬉しそうにしている。無表情だけれど少しだけ口角が上がり、雰囲気柔らかくなるのだ。

そんなジークをじっと見つめていたら、リサの視線に気付いたのか彼が顔を上げた。少しはつの悪そうな表情になったので、リサはクスリと笑う。

「ジークも何か話しかけてよ。その方が赤ちゃんも嬉しいはずだし」

「ああ……」

どうやら話しかけるのは照れくさいらしい。何度か同じことを言っているが、一向に話しかける様子はなく、リサはその度にやれやれと思うのだ。

ただ、リサは知らない。

彼女が寝ている間、ジークがお腹の赤ちゃんに向かって話しかけていることを……

「それで、ステイルベンルテアはどうするんだ？」

ジークはリサのお腹から手を離すと、話題を元に戻した。

「ひと月半後にやることだけは決まったけど、どういう内容にするかはまだ考え中。そもそもステイルベンルテアのことを知ったのが今日だし、経験者の話を聞いてから決めたいかな」

「カフェのメンバーの中で経験者といえば、オリヴィアとデリアか？」

オリヴィアとデリアはカフェ・おむすびの従業員で、接客を担当している。二人とも子供がいるため、そういう意味ではリサの先輩である。

おそらくステイルベンルテアの経験もあると思うので、彼女たちにまず話を聞きたいとリサは考えていた。

「そうだね。明日カフェはお休みだけど、二人は出勤する？」

明日はカフェの休業日。従業員はレシピの試作をしたり、備品の補充をしたりと、営業日には手が回らないことをするのだ。

ただ、オリヴィアとデリアは子供がいるし、調理スタッフに比べて休業日にやるべき仕事は少ない。だから、休んで家族サービスに務めてもらうこともあるのだ。

ここ最近の勤務体制についてはジークに一任しているので、明日の二人の予定も知っ

ているだろう。

「ああ、昼過ぎに来るって言ってたぞ」

「じゃあ、そのくらいに私も行こうかな。二人に会いたいし」

最近家はばかりいて人に会わないので、リサは退屈していた。気分転換も兼ねて外に出るのもいいだろう。

デリアとオリヴィアに会って、久しぶりにおしゃべりしたい。友人としてもそうだし、先輩ママである二人と話をするのは、リサにとつてとても有意義なことだ。

「わかった。二人にも一応伝えておきな」

「うん！ お願いね！」

翌日、リサはオリヴィアとデリアが出勤してくるタイミングに合わせて、ゆっくりカフェに向かった。

店の前で馬車を停めてもらうと、転ばないよう気を付けて降りる。そしてカーテンが閉まり、休業日を示す札が下がっているカフェのドアを開けた。

「お疲れ様です」

リサがそう言って店内に入ると、カウンターを挟むようにして立っていたオリヴィア

とデリアがこちらを向いた。

「まあ、リサさん！」

ミルクティー色の長い髪をサイドテールにした女性がオリヴィアである。

「いらつしゃい……って言うのも何か変ね」

そう言っておかしそうに笑うのはデリア。肩までのこげ茶の髪をハーフアップにしている。

「言いたくなるのはわかるよ。カフェに来るのも久しぶりだからね」

「ほらリサさん座って。お腹が大きくなってきたわね」

カウンターの外にいたオリヴィアが、リサをテーブル席に誘導する。リサはありがたく座らせてもらった。

「リサさん、ちゃんと休めてる？ 大丈夫？」

お水を持ってきてくれたデリアが心配そうに聞いてくる。

「ものすごくのんびりしてるよ。こんなに暇でいいのかってくらい」

「これまでが忙しすぎたのよ。ゆっくりできるのも赤ちゃんが生まれるまでだけだね」  
オリヴィアはかつてのことを思い出しているのだろう。ちょっと困ったように、でも懐かしそうに笑った。

「そうねえ、子供が生まれたら一日一日があつという間だから」  
 デリアもうんうんと頷きながら同意する。

「そっか、それもそうだよね……」  
 経験者の言葉にリサはしみじみと呟く。赤ちゃんが生まれたら、そのお世話でこれま  
 で以上に大変になるだろう。

自分の仕事を周りのみんなに肩代わりしてもらっている。そういう申し訳ない気持ち  
 が大きかったのだが、赤ちゃんが生まれてからのことを考えると、今だけのんびりさせ  
 てもらおうのも悪いことではないような気がした。

「ジークくんから少しだけ聞いたけど、スティルベルテアのことを知りたいんですつ  
 て?」

オリヴィアの言葉で、リサは今日カフェに来た目的を思い出す。

「そうなの。実はスティルベルテアを聞くことになったんだけど、私自身スティルベ  
 ルテアに参加したことがないから、どんな感じかまず知りたくて。二人はどういう風  
 にした?」

「スティルベルテアね。懐かしいわ。私も一応聞いたけど、特別なことはしなかつ  
 たわ。親しい人を招いたお食事会みたいな感じね」

デリアは懐かしそうに微笑みながら言った。

「うちは旦那の方が張り切っちゃってたわね。いつも仕事でいろんなところに行つて忙  
 しい人だったから、そういう機会がなかなか持てなかったせいかしら。私の友人だけじゃ  
 なく、旦那の友人もたくさん呼んだわ。結婚した時のパーティーとほとんど同じ顔ぶれ  
 だったけれど」

オリヴィアも懐かしそうな表情をする。ただ少しだけ寂しげにも見えた。

彼女の夫は数年前に亡くなっている。楽しかった思い出は嬉しくもあり、切なくもあ  
 るのだろう。

「やっぱり人によってそれぞれなんだね」

「そうねえ。スティルベルテアは生まれてくる赤ちゃんと、そのお母さんのために開  
 くものだから、主役が望むような形にするのが一般的ね」

「一人目の時には盛大に開くけど、二人目、三人目になるにつれて簡素になつていく傾  
 向もあるわ。そもそも必ず開かなければならないものでもないし、本当に人それぞれよ」  
 オリヴィアとデリアの言葉にリサはなるほどと頷いた。二人の話を聞く限り、ステイ  
 ルベルテアはとても自由度の高いイベントのようだ。

イベントの本質である『生まれてくる赤ちゃんとそのお母さんのための会』というこ

とさえ守っていれば、あとは人それぞれの楽しみ方でいいのだと思う。だが形式が決まっていけないものだからこそ、逆にどうしようか悩む。

「うーん……どうしよう。ますますわからなくなってきた……」

頭を抱えるリサを、他の二人は微笑まじげに見ていた。

「そんなに深刻になることはないわよ。リサさんの気持ちが一番大事なんだから」

「そうそう。無理して開くものでもないし、割り切って『自分が思いっきり楽しめる会にするぞ』って人も多いのよ」

オリヴィアもデリアも悩むリサを励ましてくれる。

招待客をもてなしたければもてなせばいいし、自分が楽しみたいならそのための会にすればいいと言う。

「準備が大変なら私たちも手伝うし、遠慮なく言って！」

デリアの言葉にオリヴィアも頷いてみせる。

「二人ともありがとう。よければ、また相談に乗ってほしいな」

「任せてちょうだい！」

オリヴィアから心強い返事をもらい、リサは心が軽くなった。

その後、リサは恒例の試食を兼ねた昼食に同席させてもらい、楽しい時間を過ごした。

久々にカフェを訪れたことがとてもいい気分転換になったし、オリヴィアとデリアからステイルベンルテアのこともいろいろ聞くことができて、充実の一日だった。

しかし、それが後にリサを悩ませることになるとは、この時はまったく考えていなかったのである。

### 第三章 方向性について悩んでいます。

ステイルベンルテアに向けて、リサはまず招待する人たちのリストを作っていた。ゲストの人数が決まれば、おおよその規模感もわかると思ったからだ。

「まずカフェのメンバーに、料理科の先生たち、友達のアンジェリカにセラフィーナ。あとアシユリー商会の人たちも呼びたいなあ」

日頃からお世話になっている人は、できるだけ多く招待したい。

料理人という職業柄か、リサはせっかく招待するなら、きちんともてなしたいと思っていた。ステイルベンルテアは赤ちゃんと妊婦さんのためのものだというが、もてなすことに喜びを感じるタイプのリサにとっては、それ自体も楽しみなのだ。



招待する人の名前をあらかじめ書き出したところで、思わず声を漏らした。

「うわ、結構な人数だなあ……」

リサとしてはアットホームな会にしたいと思っていたのに、この人数だと結構な規模になってしまっそうだ。

「人数を減らすか……でもなあ……」

リストアップした人たちは、いずれもお世話になっている人ばかり。招待する・しないに分けるとなると、その線引きが難しい。

「いっそ女性に限定しちゃう？　けどそれもなあ……」

ステイルベンルテアを開く人の中には、女性だけを呼ぶ人もいるらしい。話を聞いたところ、デリアはそのタイプだったようだ。

他に、カップル限定で呼ぶこともあるという。これはお茶会やパーティーでもよくあることなので、それに則ったタイプのステイルベンルテアらしい。

またオリヴィアのように、自分の友人だけではなく、夫の友人も呼ぶタイプもいる。赤ちゃんが生まれるとなると、夫側にもまた覚悟がある。ステイルベンルテアは経験者から話を聞けるチャンスでもあるので、これを機に父親になる心構えをしておきたいという人も少なくないようだ。

——誰を招待するかを考えるより先に、どんな会にするかを具体的に決めた方がよかつたかなあ……？

リサは招待客のリストを前にして、一人悩みはじめた。

オリヴィアとデリアの話を聞いて、いろいろなタイプのステイルベンルテアがあることを知り、リサはワクワクしていた。

仕事を離れて家にいる生活は、お腹の子のためとはいえ少し退屈だ。クロード家の面々とは毎日顔を合わせるものの、カフェのメンバーやお客さん、料理科の講師や生徒たちにはほとんど会えていない。

これまでカフェや料理科で働いて、毎日いろんな人に会えた。

それが最近はずっとなくなってしまったので、正直なところ、リサは寂しかった。だからステイルベンルテアで久しぶりにたくさんの人に会えると思うと嬉しかったのだ。

その結果、招待客のリストが膨大になってしまい、気が付けば結婚式の時とまではい

かなくとも、それに迫る人数になっている。

和気藹々とした会にしたいなと漠然と思っていたのだけれど、これだけの人数を呼んだらどんな会になるのか想像もつかない。

かといって今リストアップした人を減らすのは嫌だなあとも思う。

「あの、リサ様」

「ん？ どうしたの、メリル」

メイドのメリルの呼びかけに、リサはペンを持ったまま振り返る。

「アナスタシア様がいらしているのですが、お通ししてよろしいですか？」

「シアさんが？」

別館に来るのは珍しい。とはいえ特に不都合もないので、通してもらおうようメリルに伝える。

「急に来てしまってごめんなさいね。お邪魔じゃなかった？」

「大丈夫ですよ。ステイルベンルテアのことを考えてただけなので」

リサの様子を窺いながら入室してきたアナスタシアに、リサは向かい側のソファを勧める。すぐにメリルがお茶とお菓子を出してくれた。

「ステイルベンルテアのことを考えていたなら、ちようどよかったわ！ 私も友人にいろいろとね、聞いてみたの」

「どうやらアナスタシアの方も情報収集をしてくれていたらしい。」

「私のお友達はたくさんゲストを呼んで大規模にやったという人が多かったですわ。結婚してから仕事も続けている人がほとんどだし、そういうイベントはめったにないからな

のか、普段会えない人を呼ぶことも多いみたい」

なるほど、とりサは頷いた。

リサとジークは結婚して一年半が経つし、このくらいの時期に妊娠や出産するのはなんらおかしいことではない。

ただ、フェリフォミアの人々の結婚は早い。何しろ成人年齢が十六歳。男女ともその歳になれば結婚できてしまうのだ。

それぞれの仕事に馴染んだり、生活の基盤を整えたりするため、相手がいても二十歳前後までは婚約期間とする人が多い。だが、それでもリサの世界の結婚適齢期より早いことは確かだ。

加えて、こちらの世界は元いた世界より女性の社会進出が目覚ましい。なので、結婚してもすぐ子供を作るといふ人は多くないようだ。

もちろんすぐ子供を授かる夫婦もいる。ただ、その場合、女性側は仕事の量を調整したり、子供が生まれたら預けるところが必要になったりするので、いろいろと大変らしい。

子供を預かってくれる機関や民間のベビーシッターも多いので、なんとかなるようではあるけれど、子供を作るなら計画的にといふ人が多数派だと聞いている。

きつとアナスタシアの友人たちも結婚してからステイルベンルテアを開くまでの間に、

そこそこの時間が経っていたのだと思う。だからこそ結婚式以来、会えていなかった人たちをステイルベンルテアに呼んだのではないだろうか。

「あら？　もしかしてリサちゃん、招待する人のリストを作っていたの？」

アナスタシアはテーブルの上に置かれた招待客のリストに気付いたらしい。

「先に呼びたい人をピックアップすれば、だいたいの規模感がイメージできるかなって思ったんですけど……」

「それはいい考えね！　……あの、リサちゃん。私も呼びたい人が何人かいるんだけどいいかしら？　せっかく孫が生まれるから一緒にお祝いしたいの」

アナスタシアはリサの表情を窺いつつも、期待するような目を向けてくる。

オリヴィアは自身の友人だけじゃなく、夫の友人も呼んだと言っていた。それなら養母であるアナスタシアの知り合いを呼んでもおかしくはないだろう。

それにアナスタシアは自分の子供のステイルベンルテアがでできなかったから、せめて孫の時は友人たちに祝ってほしいという気持ちがあるのかもしれないと、リサは思った。

「もちろんです！」

リサが快諾すると、アナスタシアはホッとしたように表情を緩ませた。

さっそくアナスタシアから招待したい人たちの名前を聞く。ほとんどはアナスタシア

がお茶会を開く時に招いている人たちだったので、リサとも顔見知りだ。

そのことに少し安堵しながら、リサは新たな人たちをリストに加えていった。

「リサちゃん、僕の友人も呼んでいいかい？」

アナスタシアの友達を招待すると知って、養父のギルフォードもそう言ってきた。アナスタシアの友人はよくてギルフォードの友人はダメだとは言えないので、リサはもちろん頷く。

ただ、ギルフォードの友人はアナスタシアの友人ほどリサにとって馴染みがない。その上、ギルフォードの友人は国の要職に就いている人が多く、本当にステイルベンルテアに来られるのだろうか？　と思ってしまうほど忙しい人ばかりだ。

ひとまずリストに加えてみたはいいものの、気付けば結婚式の時と同じくらいの人数になってしまっていた。

「どうしよう、これ……」

本館で夕食を取ったあと別館の自室に戻ってきて、リサは頭を抱える。

ちよっとしたお茶会くらいの規模にするつもりだった。格式張らず、気軽に来てもらえるような会をリサは想像していたのだ。

だが、この人数になると大規模にせざるを得ないだろう。

リサは知らなかったが、実はアナスタシアが今日ステイルベルンテアの話聞きに行ってきたという相手は、このフェリフォミア王国の王妃であるアデリシアだった。

アデリシアのステイルベルンテアは、当然ながら王太子であるエドガーがお腹にいた時のこと。次代の王のステイルベルンテアともなれば、それは盛大なものだったはずだ。また、ギルフォードもステイルベルンテアは盛大にやるのが当然という認識である。

何しろギルフォードは由緒正しき侯爵家の生まれだ。家柄を考えると、ステイルベルンテアもそれなりに立派なものを開かなければならないし、それが一般的だと思っている。リサが考えていたアットホームで気軽な会と、貴族としての家格に見合うステイルベルンテアは、明らかに違う。

とはいえ、リサもクロード侯爵家の一員である。

カフェの店長や料理科の講師として普通に働いてきたので、リサ自身あまり意識していないが、クロード家は立派な貴族なのだ。

フェリフォミア王国は実力主義なので、貴族であろうと平民であろうと実力があれば評価されるし、貴族が偉いとか貴族だから何をやっても許されるなんて風潮もない。

しかし、貴族であるというのも実力のうちだ。爵位があるということは、そのぶん、

国に貢献しているということになる。

もちろん世襲せしやうされる爵位もあるが、貴族は国に多額の納税を課されている上に、責任も重い。経済を回し、人を導く。それがフェリフォミア王国の貴族なのだ。

リサのステイルベルンテアも、そういう事情を考慮したものでなければならぬ。まだそこまで明確な考えには至っていないものの、うっすらとそれに近いことを考えて、リサはますます悩んでいた。

うんうん唸りながらリストとにらめっこしていたら、部屋のドアがノックされた。返事をする、ドアから顔を出したのはジークだった。

「リサ、寝ないのか?」

寝室にこないリサを心配して、様子を見に来てくれたらしい。

「うん、今行く……」

寝支度は済んでいるが、ステイルベルンテアのことを考えはじめたら止まらなくなつたのだ。

リストを裏返しにして机に置くと、リサはゆっくり立ち上がる。

そしてドアを押さえて待っているジークのもとへ向かった。

「うーん……」

あれから数日経つが、リサの中でステイルベンルテアの計画は全然まとまらずにいた。今のままでと、具体的にやりたいことも決まってるのに、招待する人の数だけは多い会になってしまっただろう。

たくさんの人に会いたいという気持ちはもちろんある。でも、リサが会いたい人たちに加えて、アナスタシアとギルフォードの友人たちも招待リストに加わった。

それによって、さらに人数は多くなってしまったわけ……

リサにはステイルベンルテアに参加した経験がないので、ステイルベンルテアがどんなのかは想像するしかない。今は経験者からの話を聞いて、それを補完しているが、こんなに人を呼んで大丈夫なのかな？ と迷ってしまっていた。

「リサ様……？ お医者様が見えましたが、お通ししてよろしいですか？」

応接室で待機していたリサに、メリルがそっと声をかけてくる。寝椅子に座って考え込んでいたリサは、それにハツとして顔を上げた。

今日はこれから医師の検診なのだ。

「うん、大丈夫。お通しして」

リサが頷くと、メリルが一度部屋の外に出ていく。再びやってきたメリルは、老年の

女性を伴っていた。

「こんにちは、リサさん」

「こんにちは、先生」

顔の皺を深くして微笑む医師に、リサもつられるように笑みを浮かべる。

妊娠初期からお世話になっている専門の医師だ。ややふくよかな体に、柔らかな表情。性格もおおらかで明るいこの医師のことを、リサはすぐに好きになった。

クロード家のお抱え医師の奥さんでもあるので、家族からの信頼も厚い。

おっとりとしつつも頼もしい彼女のの前では、リラククスして診察を受けることができる。

「さてさて、赤ちゃんの様子はどうですか？」

医師の言葉を聞いてリサは寝椅子に横になる。メリルに手伝ってもらいながら、診察用の服の前をくつろげ、大きくなったお腹を出した。

この服はアナスタシアが作ってくれたものだ。上下に分かれていて、それぞれ前のボタンを開けられるようになってる。

これには医師も診察がしやすいと喜んでくれた。

「では触りますよ」

「はい」

力の抜けた緩い話し方をする医師に、リサはクスリと笑って返事をする。

優しく、でもしつかりと確かめるように触れる医師の手が、お腹の上で動くのを目で追う。付き添ってこれているメルルと、そして寝椅子の背もたれにいる小さな精霊もじつと見つめていた。

静かに触診していた医師が、やがてお腹から手を離す。

「お腹の赤ちゃんは元気そうですね。逆さになっていこともなさそうですし、順調そのものです」

にっこりと笑って告げられた言葉に、リサはホッとする。

「ありがとうございます」

「そういえば、精霊さんと赤ちゃんの交流はその後どうですか？」

医師がリサの周りに視線を泳がせた。

待つてましたというように、緑色の精霊がふわりと飛び出してくる。

この精霊はバジル。リサと契約している、緑を司る精霊だ。

不思議なことにバジルは、リサのお腹の赤ちゃんと意思疎通ができるのだ。といっても言葉ではなく、リサのお腹が光るのを見て赤ちゃんの気持ち想像しているだけなの

で、高度なコミュニケーションは取れないようだが。

「赤ちゃん、とつても元気ですよ！ 最近はバジルからだけじゃなく、赤ちゃんの方から話しかけてくれることもあるんです！」

得意げに話すバジルの言葉をリサは医師に伝えた。

すると彼女はクスクスと笑って、「それはいいですね」と頷く。

「今くらいまで育つてくると、赤ちゃんにも外の声は聞こえているようですからね。たくさん話しかけてあげてください」

「バジル、お姉さんですから、もちろんたくさん話しかけますよ！」

以前、リサが『バジルちゃんはお姉さんだね』と言って以来、バジルは姉としての使命に燃えているらしい。よくリサのそばを離れてふらりと出かけていたのに、最近はリサのもとを離れようとしない。

楽しそうだからいいかと、リサはその様子を見守っている。

「それでは本日はこれで」

「はい、ありがとうございます」

医師は妊娠後期に気を付けるべき事柄などを話すと、検診を終えて部屋を出ていく。お腹の赤ちゃんが問題なく成長している様子に、リサはホッとしながら医師を見

送った。

#### 第四章 ヒントをもらいました。

「えっと、お茶の準備はできてるし、あとは……」

リサは朝からクロード家別館の応接室にいた。リサとジークが生活している別館にも本館ほど大きくはないが、応接室がある。

使う<sup>ひん</sup>頻度は高くないけれど、クロード家の使用人がいつ使ってもいいように整えてくれている。

今日はその応接室に來客の予定があるのだ。

「リサ様、お客様がお見えになりました」

メリルがそう言って客人を案内してきた。

「リサちゃん！」

嬉しそうな声と共に姿を見せたのは、シルバーブロンドの髪をお下げにした女の子。彼女はジークの妹のライラだ。

「いらっしやい、ライラちゃん、お義母<sup>か</sup>さん」

ライラのあとから入室してきた母のケイリーにも、リサは挨拶をする。

「久しぶりね、リサさん。お邪魔するわ」

ライラやジークと違い、ケイリーの髪は濃い緑色。しかし、涼しげで整った顔立ちと青い目はジークとそっくりだった。感情があまり表情に出ないジークとは対照的に、ケイリーは表情豊かだから印象はだいぶ違うけれど。

今日はケイリーとライラが遊びに来ることになっていたので、リサは朝から楽しみにしていたのだ。

「ジークが不在ですみません。カフェの方に行かなきゃいけないくて……」

料理科はお休みなのだが、カフェの営業があるため、ジークは同席することができない。それをリサが謝ると、ケイリーは「気にしないで」と笑った。

「リサさんが働けない分、ジークにしっかり働いてもらった方がいいのよ。あの子がいてもあまりしゃべんないだろうし、今日は女性同士おしゃべりしましょ？」

自分の息子だからか、ケイリーはジークに対して遠慮がない。

「そうそう！ 私もリサちゃんといっぱいお話ししたいもん！」

ライラも同意したので、リサは思わず笑った。

二人にソファを勧めると、メリルがお茶を出してくれる。

「ジークから聞いたけど、ステイルベンルテアを開くんですって？」

お茶で喉を潤してからケイリーが切り出した。

今日二人がここにいるのは、リサの様子を見に来てくれたからでもあるが、リサがステイルベンルテアのことをケイリーから聞きたいと思ったからでもある。

ジークからそのことを聞いたケイリーが、わざわざ訪問してくれたのだ。

「そうなんです。ただ私はステイルベンルテアに参加したことがないので、どういう会にすればいいのか迷ってまして……お義母さんはどうしました？」

「そうねえ。マシューの時は初めてだったから、たくさん人を呼んだ記憶があるわ。私も友達もまだ若かったし、親たちやロドニーも協力してくれてね。放牧場を使ってガーデンパーティーにしたわ」

マシューとはジークの兄で、ロドニーとはジークの父のことである。

ジークの実家は、馬の卸売業を営んでいるため、王都の外に広い放牧場を持っているらしい。その放牧場でガーデンパーティーをしたということは、かなり大規模なステイルベンルテアだったようだ。

「ねえ、ライラの時はどうだったの？」

一緒に話を聞いていたライラが、自分の時はどうだったのか気になったらしく、ケイリーにたずねる。

「ライラとジークの時は、本当に仲のいい友達だけにしたわね。家に呼んで、ちょっとしたお茶会みたいな感じで」

「えー……」

ケイリーの答えが不服なのか、ライラは残念そうな声を上げた。

「だってねえ、その頃には友達もみんな子供がいたし、お互いの都合もあるでしょう？子供が二人目、三人目ともなると、やっぱり最初ほど盛大にはできないわ。もちろん子供が生まれてくるのは何番目の子であっても嬉しいけれどね。ステイルベンルテアの規模が小さいからって、喜びが小さいわけじゃないから、そこは誤解しないでほしいわ。ジークができた時も、ライラができた時も、ものすごく嬉しかったんだからね」

そう言って、ケイリーは隣に座るライラの頭を撫でる。

「そうなんだ」

ライラは納得したように呟いた。

ステイルベンルテアがどのようなものであれ、子供の誕生を祝う気持ちは変わらない



のだと、リサも納得できる。

「それで、リサさんは今のところ、どんなステイルベンルテアをしようと思ってるの?」「上手くイメージできないので、招待したい人のリストから作りはじめたんですが、その人数がすごく多くなっちゃって……」

「あらいいじゃない。せっかくだし呼びたい人をいくらでも呼んだらいいわ。クロード家だし、場所には困らないと思うけど、なんならうちの放牧場を使ってもらってもいいし。……あ、でも今の時期は屋外だと寒いわね」

「ありがとうございます」

ケイリーの気持ちが嬉しくて、リサは微笑んでお礼を言った。すると、ライラが「えねえ、リサちゃん」と話しかけてくる。

「そのステイルベンルテア、ライラも参加できたりする?」

「もちろん! 是非来てほしいな」

「……あ、でも来るのは大人ばかりなんでしょ……? そしたら場違いかなあ」

ライラは少し考えてから、しゅんとした。

十一歳のライラは学院の初等科に通っている。リサの元の世界で言うところの小学校高学年だ。

出会った頃に比べたら大きくなったけれど、まだまだ子供。ステイルベンルテアには参加してみたいが、子供一人で参加して楽しめるか不安になったのだろう。

大人のパーティーに興味があつて参加しても、子供が楽しめるのは最初のうちだけだったりする。子供にはまだ難しい話も多いだろうし、そんな中にいると飽きてくるものだ。

もしかしたらライラはそのような経験をすでにしているのかもしれない。

だがライラの反応から、リサはふと思いついた。

「子供でも楽しめるようなステイルベンルテアならいいかもしれないですね……」

「子供でも?」

リサの言葉にライラが顔を上げた。その目は期待するように輝いている。

「ライラちゃんの他にも同じくらいの歳の子がいたら、一緒に遊んだりもできるかなって思ったんだけど……」

「あら、いいじゃない! 子供がいる人でも参加しやすいっていうのは、ステイルベンルテアにはぴったりの条件だと思うわ。子育ての話聞けたりもするし」

ケイリーがリサの考えを後押ししてくれた。

リサの身近な人でいえば、オリヴィアとデリアには子供がいる。二人には是非来て

ほしいと思っていたが、デリアはともかくオリヴィアはシングルマザーなので、息子のヴェルノを連れての参加になるだろう。

他に子供の参加者がいなければ、ヴェルノもライラが心配したのと同じような状況になってしまう。

もちろんヴェルノだけじゃなく、デリアの娘でヴェルノと仲良しのロレーナも呼べばいいのだが、それでも大人向けの会ではすぐに飽きてしまうだろう。

そういったことを考えると、ライラの言葉はリサにとって大きなヒントになったような気がした。

大人も子供も楽しめるステイルベンルテア。

それには、ただ子供が参加できるといっただけではなく、彼らが飽きないような工夫が必要だし、かといって子供だけに焦点を当てるのもダメだろう。

ケイリーがマシユを身ごもった時に開いたというステイルベンルテアは、放牧場でのガーデンパーティーだから、子供たちが自由に走り回れたかもしれない。

だが、今の季節は冬。

さつきケイリーが言った通り、さすがに寒いので屋外は難しい。

そうなる室内で大人も子供ももてなせるパーティーを考えないといけない。

漠然<sup>ぼくぜん</sup>としていたステイルベンルテアのイメージがはつきりすると共に、リサは自分がワクワクしてきたのを感じていた。

## 第五章 再考しました。

ケイリーは最後に『時間も余裕もある一人目の時には、自分がやりたいステイルベンルテアを思いつきりやるといいわ』と助言をしてから、ライラと共に帰っていった。

一人になったリサは、どんなステイルベンルテアにしたいかを考え直すことにする。

「まず赤ちゃんを祝ってもらうことですよ」

それがステイルベンルテアを開く根本的な理由だ。

しかし、わざわざ意識せずとも来てくれた人はみんな祝ってくれると思う。

「あとは私自身がどんな会にしたいかってことだよね」

ケイリーは『自分がやりたいステイルベンルテアをやるといい』言っていた。

まだお腹の子が生まれてもいないのに、二人目や三人目の子供のことを考えるのはおかしいけれど、もしも一人っ子になるのであれば、ステイルベンルテアを開くのはこれ